

分類研究分科会（2005年度活動報告）

代表者：藤倉 恵一（文教大学）
会員数：4機関4名（2006年3月31日現在）
会員：正会員
伊藤 民雄（実践女子大学） 鈴木 学（日本女子大学）
藤倉 恵一（文教大学） 山本 有里（学習院大学）
延べ出席者数：44名（内訳：月例会10回・夏期研究合宿）

1. 活動の概要

1) 基本テーマ

件名、シソーラス、Indexing理論等を含んだ“トータル”な意味での図書館分類法とその理論に関する研究を基本テーマとする。

基本テーマを念頭に、「日本十進分類法（NDC）」、「Dewey Decimal Classification（DDC）」、「Bliss Bibliographic Classification 2nd Edition（BC2）」という三つの分類法についてその性能の比較検討を行う。具体的には教育分野について取り上げる。

2) 活動概要

上の基本テーマは本来、前期（2002－2003年度会期）のものであった。が、BC2の内容理解に多くの時間を費やしたことや、DDC22版への改訂が会期中にあったことなどの理由により、DDCを分類法比較研究対象から外していた。そこで今期は前期テーマの延長として、DDCに対する理解を深めることを目標としてまず掲げており、2005年度はその継続研究（主として実証）期間にあたる。

実際の研究活動は、2年間という活動期間を、

- ① 第一期：トータルな意味での現代図書館分類法理論に関する最近の論考のレビュー等を通じて参加者全員の理論的な基礎レベルを整える
 - ② 第二期：NDC、DDC、BCの3つの分類法についてそれぞれの基本的な考え方をとらえた後、最新の版において特に教育分野の各分類法での扱い方を比較検討すると共に、その体系・構造・考え方等について詳細に討議する
 - ③ 第三期：研究発表および報告を視野に2年間の総まとめを行う
- という3つの期間に分けて研究を進めている。

2005年度は第二期の途中、具体的には研究対象として採り上げたDDC20版（1989年；教育分野の改訂前）と21版（1996年；教育分野の大規模改訂）、22版（2003年；現在の最新版）および13版（1932年；Dewey監修方針の直系）の「370 Education」本表訳出および検証にとりかかったところから始めた。

この作業は7月例会まで継続し、夏期研究合宿での分類付与作業の手がかりとなった。

夏期研究合宿は自由国民社刊「現代用語の基礎知識」1993年、2003年、2005年の各版における教育分野の見出語のうち129項目に対しDDC4つの版の記号をそれぞれ付与し、その内容を検証することを課題とした。

合宿には会員4名に加え3名のゲスト参加者を迎えることができた。具体的な手順としては合宿前の準備期間として21版以外の各版に対し2名ずつ分類記号を付与し、その結果を順に発表して比較、検証、版ごとの記号を決定するという手順を踏んだ。

なお、21 版と 22 版の間に（教育分野において）記号の差異はほとんどなく、実際の検証の焦点は 20 版と 21・22 版、13 版という 3 種の記号に置かれた。

2006 年 3 月例会においてすべての項目の検証が終了し、結果は以下のようになった（研究発表「DDC の実効性を考える」および研究報告「DDC (Dewey Decimal Classification) の実効性を比較検証する」にて発表したものの数量更正)。

13→20 版で付与結果（分類番号）に差異があったものは、129 項目中 84 件あった。これは(1)項目が増え、より適切な番号付与が可能になった、(2)当時は存在しなかった事象（コンピュータを利用した教育など）に対して番号が付与できるようになった、(3)記号の再配置によって分類される位置が変わったという理由に大別できる。

20→21 版では前述したように大きな改訂があったわけだが、20→21 版での付与結果の差異は 129 項目中 22 件に過ぎない。これは(1)370 や 371 の記号再配置によって分類される位置が変わった、(2)記号再配置によって記号が簡略化された、(3)体系が細密化したことなどが挙げられる。

21→22 版については、教育分野にほとんど改訂が見られなかったが、法律(340 Law)に大掛かりな改訂（部分的にファセット化）があったため、今回の付与結果では教育の法律に関する 2 件が該当した。なお、13 版から 22 版に至るまで結果に差異がなかったものは 113 項目中 40 件、逆に 13 版、20 版、21 版で付与結果が毎回異なっていたものは 17 件あった。

これらの結果から見えてくるものは、DDC の改訂の特徴である大規模な改訂を経ても与えられた分類記号への影響はそれほど大きくはなく、分類表を実際に使用する図書館への影響も過大なものではないであろう、というひとつの結論であった。

その他、DDC の使用感、主題に対する表現力、日本の事象に対する表現力などをそれぞれ検証した。

3) 研究成果

2005 年 12 月 22 日、立正大学で開催された研究報告大会において、前項の研究成果を「DDC の実効性を考える」として発表した。また、その内容を「DDC (Dewey Decimal Classification) の実効性を比較検証する」としてまとめた。

4) TP&D フォーラム（整理技術・情報管理等研究集会）の共催

1991 年に日本図書館研究会整理技術研究グループが中心となって発起したこのフォーラムの共催も分類研究分科会の重要な役割である（現在の主催は同フォーラム実行委員会であり、分科会会員も実行委員に参加している）。

このフォーラムは全国各地の整理技術・情報管理（知識組織化、情報検索）等に問題意識を持つ研究者・実務者の研究・交流の場であり、研究発表に対する議論を通じて発表内容へのさらなる興味を深めていくという機会である。

今年度は 2005 年 8 月 27 日（土）～28 日（日）に神戸・グリーンヒルホテル神戸にて第 15 回となる TP&D フォーラム 2005 が開催された。

2. 刊行物その他

分類研究分科会は 1955 年（昭和 30 年）12 月 7 日に発足した最も歴史の長い分科会であり、今期設立から 50 周年を迎えた。そこで東地区部会研究部の協力を得て記念事業を計画してきた。

2004年度は記念シンポジウムおよび祝賀会を開催し、2005年度はその内容を記念誌としてまとめるべく作業を進めてきたが、諸事情により作業が遅延している(2006年3月予定)。刊行は2006年度を予定している。

文責：藤倉恵一（分類研究分科会代表）